パーソン

デザインオフィスヨウコモリタ代表
森田　陽子さん

鞄産地の思い届ける

デザイナーとして産地に深く関わり

兵庫県豊岡市は奈良時代から始まる柳細工を起源に鞄の産地として千年の歴史があり、今でも地場産業として国産バッグの約7割を製造する。06年に地域団体商標として認定された兵庫県鞄工業組合の登録商標「豊岡鞄」は、意欲的な商品開発と市場発信で成功した地域ブランドの一つと言える。この成功に欠かせない存在の一人が、バッグデザイナーの森田陽子デザインオフィスヨウコモリタ代表だ。東京から足繁く豊岡に通い、技術への造詣の深さと熱意が、結果をもたらし、産地を力づけている。

もりた・ようこ
東京都杉並区出身。デザイン専門学校卒。バッグ・革小物製造のアジオカ、松崎で商品企画デザイナーを経て、10年デザインオフィスヨウコモリタ設立。17年から豊岡鞄認定審査員。

—バッグのデザインに携わったきっかけは。

バッグのデザイナーとして歩み、33年になります。学校では学んでいたので、自分もその道に進むつもりで皮革製袋物製造の昧岡（現アジオカ）に応募しました。しかし社長面接でなぜか「あなたは企画」と言われ、それ以来今日までずっとバッグのデザインに携わっています。入社前のあに社長が何を感じられたのかはわかりませんが、よく育てていただいた。今では感謝の気持ちでいっぱいです。

三十数年前はバッグ、財布の専門のデザインコースやスクールが無く、バッグメーカーのデザイナーはファッション、もしくは工業デザインの出身者が多かったと思います。バッグのデザイン教育が確立されておらず、企業内で専門デザイナーを育てる時代でした。

問屋では商品企画に女性が見受けられましたが、当時の職人はほとんど男性社会でした。今では物作りの関心が広がり、豊岡まちづくりが運営するバッグに特化した拠点施設、トヨオカカバンアルチザンアベニュー内にある鞄製造のエキスパートを養成するスクールには、女性が3分の1を占めるようになっています。

最近はデザインよりも物作りがしたいと言う声を良く聞くようになりました。ただ、見よう見まねの独学での物作りは製品と言うより、趣味の延長にとどまります。簡単に手作り品を売れるサイトが増えたことあり、ハンドメイド感覚のものがあふれているのは少し残念です。かつてと違い、今はファッション系専門学校にもバッグ・財布のコースがあるところが増えているので、きちんと学んで製品を作る人が増えて欲しいと思います。

■デザインオフィスヨウコモリタ　バッグ、ランドセル、財布、テキスタイルデザイン企画のデザイン、プロデュースをする森田陽子氏の事務所として10年に設立。現在、コレクションブランドや豊岡鞄「ペルチェント」のレディスバッグ、三越伊勢丹「ロイスター」のランドセルなどのデザインを手掛ける。独りよがりでなく、企業に利益をもたらし、産地の思いを届けるデザイナー活動を心がける。事務所は情報、交流の場を目指す。

国産品の評価を高める豊岡製

—「豊岡鞄」との関わりについて。

14年、トヨオカカバンアルチザンアベニューを開設するにあたり、レディスバッグを始める話が持ち上がりました。レディスは集客が見込めるからです。しかし豊岡産地はメンズバッグメーカーが多く、レディスが不得手だったことから、私に声が掛かりました。私は味岡のかばん事業部創設以来、今でも頻繁に何度も東京から豊岡に足を運んでいます。そんな女性デザイナーは他にいませんので、私が一から教える感覚でした。

多くのメーカーは柔らかい革を扱うこと自体が苦手でしたが、今ではすっかり技術が向上しています。

—トヨオカカバンアルチザンアベニューの地元の評価は。

トヨオカアルチザンアベニューは14年11月に、グッドデザイン賞の都市づくり・地域づくりに関わるようになりました。

・コミュニティづくり部門を受賞しました。開設から約半年しか経っていませんでしたが、周辺地域との連携や商品・ブランド開発、人材育成、空間構成などのグランドデザインが地場産業の先進事例として評価されました。

豊岡市中心部にある青田商店街は04年から、活性化のためにカバンストリートとして認知を広めています。ターゲットは鞄を買いに来る関西圏の客、近くにある城崎温泉に来る観光客、そして地元客です。しかし豊岡はバッグの製造業は多いものの、小売業はひとなかったのです。カバンストリートに旗艦店とも言えるトヨオカカバンアルチザンアベニューが出来たことは、地元にとって大きなニュースでもありました。これを機に周辺に鞄を扱う店が増え出しています。ランドマークを作り、カバンストリートを知ってもらうという計画は、この3カ年で十分に機能したと思います。

トヨオカカバンアルチザンアベニューでのミーティング風景

—産地ブランドとしての成長は。

豊岡鞄が地域団体商標として認定されたのは06年です。当初は業界内にとどまっていた認知が、ここまで広まったのは、産地を看板にしただけのブランドではなかったからです。各企業が同業者の厳しい審査を経て形にし続けた結果、口金が優雅、ナイロン生地が得意など、各社それぞれに技術的な強みが生まれました。そうして少しずつ商品を増やしてきたことで、多様性のあるブランドに育ちました。かつ自分たちが直接販売しているので、消費者からの指摘に素早く対応した改良も重ねています。これが問屋経由のEM（相手先ブランドによる生産）だと、一度作ったものをマイナーチェンジするのは至難の問題などもあり、なかなかできません。メーカー直販の強みがこうした点にも表れます。また、常に改良を続けているメーカーの商品ほど良く売れています。

—産地ブランドとしての成長は。

豊岡鞄が地域団体商標として認定されたのは06年です。当初は業界内にとどまっていた認知が、ここまで広まったのは、産地を看板にしただけのブランドではなかったからです。各企業が同業者の厳しい審査を経て形にし続けた結果、口金が優雅、ナイロン生地が得意など、各社それぞれに技術的な強みが生まれました。そうして少しずつ商品を増やしてきたことで、多様性のあるブランドに育ちました。かつ自分たちが直接販売しているので、消費者からの指摘に素早く対応した改良も重ねています。これが問屋経由のEM（相手先ブランドによる生産）だと、一度作ったものをマイナーチェンジするのは至難の問題などもあり、なかなかできません。メーカー直販の強みがこうした点にも表れます。また、常に改良を続けているメーカーの商品ほど良く売れています。

—職人技術の継承は。

バッグ業界には、素晴らしい技術を持った職人が多くいました。ただ家内工業的なところが多く、後継者がいない例も少なくありません。昔いた職人の技術がどれだけ継承できているのか疑問に思っています。私がバッグデザイナーとして歩み出したころは、まだたくさん職人の方がいらしたので、色々と作り方を聞くことが、デザインに生かすことができました。私もしばらくは私のすぐあとまでが、現場の職人と話しながらデザインできた最後の世代だと思います。

トヨオカカバンアルチザンスクールでは、高い技術を持つ職人の方が講師として若い人を教えており、そのことがとても素晴らしく思います。その生徒の中には在校中に製品化できた人もいます。こうした熱意ある人が作ったものを製品化する企業の姿勢もすごいと思います。

—産地ブランドとしての成長は。

今年4月から、私とアルチザンスクールのメイン講師の竹下慕蘭先生が、豊岡鞄認定審査員に加わりました。ブランド開始から10年余り経ち、産地内業者の相互評価だけでなく、一歩進む必要があったからです。私はトレンドや市場性を加味したデザインなどの視点で臨むことになります。竹下先生はカリスマ職人として有名なので、同業者同士だと「仕方がない」と妥協するところを許さず、「こうすれば良いはずだ」と、もっと上のレベルを狙える商品になるべく助言を下さいます。これまで組合内だけの審査に、外部の私たちが加わることで、さらなる進化が生まれることを期待しています。

二十数年前に初めて訪れた豊岡は、言われたことをきちんとするだけの産地でした。それが自分たちで何とかしようとする、前向きな産地になっていることが心からうれしく感じています。

記者メモ

メーカーはネタの宝庫だとして「問屋にいた時から産地メーカーを訪れるのが好きだった」と語る森田さん。あれもこれもできるのではと自分で作らない分、いつも新たな発見があると言う。物づくりの現場が楽しくて仕方のない様子がひしひしと伝わってきた。東京から兵庫県豊岡市まで片道5時間以上かけて日帰りしたことも多かったようだ。豊岡だけでなく全国各地でものづくりに励む人技術に対する誇りを伝えたいとも。

半面、後進のバッグデザイナーについては、品質よりも売れ筋商品や有名ブランドにデザインを似せようとする風潮が強いと手厳しい。メーカーが消費者に近づいた結果、独自性を高めることに最善を見いだしたのに対し、生産・小売りの現場を離れたところでの選れは冥になるところだ。これはどの業界でも言えることだろう。

生産、卸、小売りの三方良しはそれぞれのコミュニケーションと相互理解の強さがあって成し得ることを再確認した。

（津田茂樹）